

文京区

BUNKYO GENDER EQUALITY CENTER

# 男女平等センターだより

2011

No. 67

Topics

～男女平等参画社会の実現に向けて～

## 男女平等参画は 子どものおときから

寄稿

川村学園女子大学教授  
文京区男女平等参画推進会議副会長

うちみざき たかこ  
内海崎 貴子

### Contents

- 男女平等参画は子どものおときから ————— 2,3
- 文京区の介護保険制度の現状と今後は ————— 4
- **プラスワンセミナー** ジェンダーの視点で拓く「親学」 ——— 5
- 国際女性の日に寄せる国連事務総長のメッセージ ——— 6
- 区からのお知らせ  
改訂された「文京区男女平等参画推進計画」 ————— 7

2011年3月31日発行

発行／文京区女性団体連絡会 会長 大川米子  
〒113-0033 文京区本郷4丁目8番3号  
TEL.03-3814-6159 FAX.03-5689-4534

文京区男女平等センターは  
文京区女性団体連絡会(文女連)が  
指定管理者として管理・運営しています。



# 男女平等参画は 子どもときから



川村学園女子大学教授 文京区男女平等参画推進会議副会長 内海崎貴子 うちみざき たかこ

## はじめに

2011年4月から、男女平等参画社会の実現に向けた施策の推進を図るために、「文京区男女平等参画推進計画 平成23年度～平成27年度」(以下推進計画と略記)が実施されます。この計画には、新しく「ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)」が取り入れられるとともに、計画の一部は「配偶者暴力防止基本計画」を兼ねることになります。

言うまでもなく、男女平等参画社会の実現には、一人ひとりが男女平等の意識を持つことが必要です。ここでは、日ごろ私が従事している保育者(保育士・幼稚園教諭)／教員(小・中・高等学校教諭)養成の立場から、男女平等参画について考えてみたいと思います。

## ワーク・ライフ・バランスと子育て

2008年12月、関係閣僚、経済界・労働界・地方公共団体の合意により、「ワーク・ライフ・バランス憲章」と推進のための行動指針が策定されました。推進計画では、「ワーク・ライフ・バランス」を「女性も男性も、仕事、家庭生活、地域活動などの様々な活動について、やりがいや充実感を感じながらその責任を果たすとともに、個人や家族

のライフステージに応じて、多様な生き方が選択できる状態のこと」とらえています。

それでは、実際の生活ではどうでしょうか。区民意識調査(平成21年度9月実施)を見てみると、男女とも多くの人が、理想としては、「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先したいと考えているにもかかわらず、現実には、女性は「家庭生活」、男性は「仕事」を優先する結果になっています。依然として、性別役割分担は解消されていません。

また、子育てに対する考え方をしてみると、「父親はもっと子育てに関わる方がよい」と答えている人は9割を超えています。実際の、日本の男性の育児時間(平均)は、1日あたり33分間(内閣府「男女共同参画白書」平成22年版)です。女性の育児休業取得率が85.6%であるの対して、男性の育児休業取得率は1.72%です。これでは、男性が子育てを担っているとは言えません。



その背景には、雇用状況や労働条件の悪化、男性の育児休業取得の困難さ等、必ずしも個人の意識に還元できない様々な問題があります。しかしながら、とりわけ「男性は仕事、女性は家事・育児」という性別役割分担意識が、女性の就業継続と男性の育児参画を阻んでいるのではないかと考えられます。子どもの成長に大切なのは、安心・安全な生育環境と多様な「人・物・出来事」とのであいです。男性の育児参画が望まれます。

## 保育・教育現場での男女平等

ところで、性別役割分担意識は、どのようにして形成されていくのでしょうか。その様子の一部を保育所や幼稚園の現場から見えます。私は、実習生指導のために年間20～30園、保育所や幼稚園を訪問していますが、保育の現場では、保育者の言動、保育室の環境構成、遊び、教材や服装等、様々な場面において男女で分けることが頻繁に見られます。保育者が、無意識・無意図的に男女で分けた保育を行っているのです。

先日訪問した幼稚園の4歳児クラスの保育室壁面には、月ごとの風船のなかに、その月生まれの子どもの名前が女兒はピンク、男児はブルーで書かれています。3歳児クラスの子どもの

持ち物・靴入れのマークは、男児がトラヤライオン、飛行機、電車、女児がウサギやリス、風船、花でした。別の保育所では、3歳児クラスで男女に分かれて玉入れ競争をしていましたが、そのときの保育士の言葉かけは「男の子チームが先にやります。女の子チームはがんばって応援しましょう！」でした。

このように、子どもは保育所や幼稚園のころから、男女で分けられて育ちます。分けられることによって、子どもは男女というカテゴリーを学習していきます。男女には共通する部分が多いにもかかわらず、分け続けることによって、結果的に男女の差異が強調されることになり、その後の子ども性の別役割分担意識の形成に繋がってきます。

もちろん、排泄や着替え、身体検査など、男女で分けることが大切な場面はあります。しかしながら、そのような場面以外では、男女で分ける必要はありません。誕生日の名前は同色で記載できますし、マークは子どもが自分で選ぶという方法もあります。チームは、誕生月や背の順で編成することも可能です。子どもに様々な出会いを準備するためには、男女以外の分け方が必要です。このように、性別役割分担意識の形成は、乳幼児期から始まっています。男女平等意識を形成するためには、性別に関わらず、一人ひとりの

違いを尊重する保育／教育が重要です。私は、保育者や小中学校の教員研修で、男女平等保育／教育の講師を務めています。最近の研修会では、心と体の性が一致しない子ども、男女という性別に分けられない子ども等への対応が取り上げられるようになりました。保育／教育の現場では、以下の新聞記事のように、対応の難しさに戸惑っているという現状です。

心と体の性が一致しない性同一性障害と診断された鹿児島県内の公立中学1年の女子生徒(13)について、学校側が4月から男子制服で通学するのを認めたことが26日、学校と地元教育委員会への取材で分かった。名簿上の性別の扱いや、体育の授業をどうするかなどは今後、生徒や両親の希望を聞きながら対応を検討する。(中略)・今月20日に医療機関で性同一性障害と診断されたのを受け、学校側が男子の制服着用を認めた。校長は「生徒と両親が男子の通称名での通学を望むなら、名簿も通称にすることを考えている。生徒が楽しく登校できる状態をつくってきたい」と話した。

(2010・2・26 共同通信)

多くの子どもは、保育所や幼稚園の時期に自分の性(別)を認識します。保

育者や教員はもとより、周囲のおとなには様々な性(別)のあり方についての学習が必要です。

### まとめにかえて

6年前に卒業したゼミ生が、児童福祉施設で実習をしていた時の話です。おもちゃ作りを手伝うことになり、彼女は電気のかぎりで木片を切っていました。その時、指導者の女性から「あなた、女の子なのに電気のかぎり使えるの？すこいわね、どこで習ったの？」と言われたそうです。ゼミ生は「学校の家庭科で習いました。ハンダ付けも戻ってきて「先生、木工も電気も家庭科で習うから、女の子もみんなできるのに、私、ほめられた、不思議！」と言っていました。

家庭科の男女共修が実施されたのは中学校が1993年、高校は1994年でした。それ以前、中学校の男子は技術科(電気・機械・木工等)、女子は家庭科(被服・食物・保育等)と、学習内容が男女

で異なっていました。改めて見てみると、明らかに性別役割分担を前提とした、あるいは維持するための学習内容であったことが分かりますが、1980年以降に生まれた人は、義務教育で男女共修の家庭科を学習しています。ですから、木工得意女子、料理大好き男子がいても不思議でも何でもありません。保育所や幼稚園では、男性の保育士／幼稚園教諭が増えています。プールのランドセルで通学する女子児童にも出会います。30代男性を中心に「イクメン」志向は高まっています。少しずつ、確実に、性別にとらわれない世代が育っていることを実感しています。



# ジェンダーの視点で拓く「親学」

〜今、子育て中の育メン研究者に聞く〜

開催日：平成二十三年二月二十六日（土） 午後一時半  
 講師：日本学術振興会特別研究員・  
 法政大学キャリアデザイン学部講師 和田 悠氏

和田先生は新進気鋭のジェンダー研究者で、3歳児と0歳児の2児の父親。保育園に子どもをあずけながら、現在、子育てに取り組んでおられます。セミナー前半では、理念としては素晴らしいけれども、なぜ、父親の育児参加は実際には進まないのかを戦後史をひもときながら解説しました。後半では、講師自らの経験を紹介しながら、男性が育児参加することの意味をジェンダー視点から分析し、参加者に語りかけました。

も協力しながらやっていきたいという思いが強いにもかかわらず、実際にはそうなっていないこと。いまなお、性別役割分業体制の克服は重要な課題であることが明確になりました。

はじめに、さまざまなジェンダー統計を指し示しながら子育て環境をめぐるジェンダーについての現実を参加者で共有しました。女性は男女がともに仕事も子育て

つぎに、戦後日本における性別役割分業体制の形成・定着・変容の歴史についてのコンパクトな解説がありました。高度成長期に女性の家庭責任が強調され（象徴的なものは家庭科の女子必修）、社会での働き方の標準が男性正規雇用に置かれたこと（「妻つき男性モデル」の成立）、女性は往々にしてパート労働者、あるいは嫁として育児・介護に無償で従事するよう社会的に水路付けられたこと

り、男女がジェンダーフリーな生き方を志向できなかったという意味で不自由だった高度成長期が過度に理想化され（たとえば映画『三丁目の夕日』）、ジェンダーバックラッシュが展開したということも、お話しされました。

さいごに、ジェンダーの視点で拓く「親学」として、男性の育児参加を少子化問題の解決という文脈に矮小化して理解するのではなく、暴力的なものとして深くかわりのある男らしさを解体していく契機として捉えることが重要ではないかという提案がありました。子どもという他者と対話していく経験、夫婦で家事育児の分担について話し合う経験を大事にすることが家族を真に民主化していくことではないかと結ばれました。

セミナー終了後は講師を囲み本音でフリートーク。講師が若くて男性だけに、同世代のママから活発な意見が出され、予定を大幅に超えて1時間近くの話し合いになりました。



日本社会が内向きにな

（福永清美）

